



わたしの聖戦

女性が働くということ

101

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

美人のゆくえ

小学生のころ、クラスには必ず「美人」とか「かわいい」と称賛される女の子がいたものだ。男子の口にはのぼるその種の女子たちは、同性からみても本当に可愛らしかった。そういう子の多くは、色白丸顔で、髪はきらきらと滑らかに伸び、いつ見てもきれいにまとまっていた。私の時代には三つ編みの子も珍しくなかったが、今思い返してもそのレトロで「女子学生」の感じは好ましく懐かしい。男子からみると手の届かない天使のような女子であっただろうが、女子たちにとってもそうやすやすと近づける存在ではなかった。

中学生になっても同じように、見栄えのいい女子は常に注目をあび、輝いていた。いうまでもなくそれを遠くから見ているその他大勢の女子のなかに私はいた。どんなにがんばっても彼女たちのようにはなれない自分というものをすでによく知っていた。

幼いころは、親や身近な大人から「かわいい」といわれて育つことが多い。それは顔かたちをほめてくれるというより、どちらかといえば身内びいきである場合がほとんど。あるいは小さいこと自体の可愛らしさを言っているにすぎない。少し大人になつて学校にでも行き

はじめると、そこには自分より遥かに周囲の目を引く、本物の「かわいい」子がわんさかいることに気がつく。過酷な現実は、それまで身内のなかでちやほやされてきた自分のささやかな自尊心を無残に打ち砕いてくれる。

育んでいくのが通常の成長過程だろう。これを心理学的にはアイデンティティの確立というが、いわば挫折や悔しさやあきらめがごっちゃ混ぜになつたうえでの、必要不可欠な大人へのワンステップである。

がないのかもしれない。ある程度大人になつてからの苦難は、ときすでに遅く、その人の成長の糧にはなかなかならないようにも思う。姿かたちが見目麗しいのは、紛れもなく素晴らしい神様からの贈り物だが、そのことがかえつて不幸をもたらすケースも多い。いやはや、だからこそ人生は面白く、かつ捨てがたいのだろう。

見栄えのいい子は
常に注目をあび



はじめてみると、知らないといわねえ、知らず知らずのうちにそれ以外の「ウリ」を探したり身につけたりするようになる。勉強やスポーツや習い事などなど、没頭できるものや得意とする何かを探っていく。そうやってそれぞれに居場所を見出しながら自分らしさを

に地味で目立たなかった子や不器用で不美人だった子が、これまた天地がひっくり返つたがごとく社会的地位を得ていたり、生き生きと日々を暮らしていたりする。小さな頃から、花や蝶よと育てられると、おのずと人並みの挫折などを味わう機会

その昔、私は周りの大人から「大きくなつたらきつとかわいくなるから」という、慰めとも哀れみとも思える言葉をかけてもらった記憶がある。その言葉は少なからず私を傷つけたが、今となつてはそれも笑い話。おかげさまで人生の醍醐味はたつぷり味わってきたつもりだ。「美人のゆくえ」より「不美人のゆくえ」のほうがドラマにあふれているのは間違いないといえるだろう。

イラスト・三浦義雄
タイトル・浅井健史